いろいろなあそび——四歳児——

守永英子

○自分からあそぶ

子どもは、本来みずからの中に、自発活動し、自己発展する力を持っているといわれる。しかし、新しく入園してくる子どもたちを迎えいれてみると、そこに現われるものは、かなりの個人差がみられる。新しい、幼稚園生活という環境の中にはいり、周囲から受ける新しい刺激につき動かされて、保育室の遊具を次々とさわってみたり、広い園庭にとびだして庭中を探索する子どももあり、また、他の子どもに働きかけて、すぐ友だちをつくれる子どももある。一方、教師がそばにいてしむければ、泣かずに砂をいじったり、ぶらんこやすべり台にのったりするが、教師が用事で側をはなれると、あそびをやめて、いそいであとを追う子ども、他の子どものあそびを傍観してたたずんでいる子ども、何もしないで、椅子に腰かけたり、ふらふらしている子どもなど、いろいろなタイプがある。

先ず、教師としての悩みは、あそび出さない子どもを、どうしたら自分から動き出すようにしむけられるかにある。つまり、危険や、他の子どものさまたげとならないかぎり、遊びの種類を問わず、「自分からあそび出すあそび」が望ましい活動であると考えるといってよいであろうか。

自分から動き出す子どもは、危険やさまたげにならないかぎり、あまりこまかい制約を与えずに暖かく見守り、その活動が妨げられずに快く続けられるように心を配らなければならない。砂場にいる子どもたちには、洋服の袖をまくってあげたり、道具を使いやすいように砂場のそばに出しておいてあげたり、積木やままごとをしている子どもたちには、必要に応じて場所をひろげてあげたり、ぶらんこや鉄棒をしようとしている子どもたちには、まわったり、こいだりできるように手をかしてあげたりしなければならないし、自分たちでかなりあそべる子どもたちでも、他の子どもたちとの間のつまずきを解決する力は不充分なので、よく観察していて、必要なときは力をかさなければならない。また、視線を交したり、声をかけたりして、教師との結びつきを確かめさせて安心させなければならない。

自分からうまくあそべず教師にあそんでもらおうとするタイプの

子どももある。時期こそずれていたが、A男もB子も同じような経過をたどった。泣いて教師について歩き、泣きやむと他の子どもたちの「草つみにいこう」「ぶらんこおして」などの教師への働きかけを無視して「鉄鬼しよう」「かくれんぼしよう」と、自分のきめたあそびをさせようとする。「それじゃ、かくれんぼしてから、あとで草つみに行きましょうね」といっても受けいれない。そしてその日のあそびがおもしろいと、その後も毎日教師を独占して同じあそびをくり返そうとする。あそびが少しもりあがってきた頃、教師がそっとぬけて他の子どもたちの方へ行くと、すぐに気がついて追ってきては、べそをかいたり、そのあそびを続けるように主張する。このようなタイプの子どもには、最も手がかかり、他の子どもたちと接する機会をのがしてしまうのが悩みであった

砂の土のしゃぼん玉がきれい

が、まだ教師を必要とする子どもたちを同じあそびに誘い入れることで多少緩和した。しかし、ともすれば、このような子どもに独占されてしまう教師には失望を感じたのか、誘っても加わらずに、ちらりと横目でみながら庭ですれちがうグループもあったようである。

傍観的な子どもたちには、眺めているあそびにはいるように誘ってみる。「お砂場する?」と誘っても黙ってにこにこしている子どもには「○○ちゃんがおいしそうなアイスクリームつくっているわ。ひとつ下さいな。先生といっしょにたべましょうよ」といっしょにたべるまねをしたり、「こんどは、あなたが先生につくってくださる?」などと、その場所やそこにいる子どもと関係づけてあげることは役に立つようである。

何もしない子どもにも、勝気さや用心深さから、なかなか自分を出そうとしないものもあるし、何をしてよいか自分でわからない子どももあるように思われる。教師は、その子どもの好きそうなあそびをみつける手伝いをしなければならない。そばに腰かけて絵本をひろげてみたり、クレヨンと画用紙を出してあげたり、小さな卓上積木をくずれる程高く積んでみせたり、すべり台やジャングルに誘ったり、鬼ごっこやかくれんぼの時は、教師が手をつないでいっしょに鬼になったりしてみる。しかし用心深い子どもなどは、自分で環境を見極め安心できて自分を出しはじめるまで、あせらずに待ってあげる程の心のゆとりが教師の側にも必要かもしれない。

いろいろなタイプの、いろいろな段階の子どもを相手に、目のまわる忙しさではあるが、やはり、それぞれの子どもの、それぞれの活動を大切にして、教師のプログラム通りに動かされるのを待つのではなく、自分の興味につき動かされて、興味の対象に自分から働きかけていくという積極的な姿勢を、園の生活の基盤にしたいと思うのである。

○友だちとあそぶ

新しい生活に少しなれてくると、同じすべり台で、同じ砂場であそんだなどという機会をきっかけに、友だち関係ができてくる。「君名前なんていうの？」「ぼく○○っていうんだよ、君は？」などの子ども同士の会話も耳にすることがある。教師の助力がその関係を促進するのに役立つ時期である。

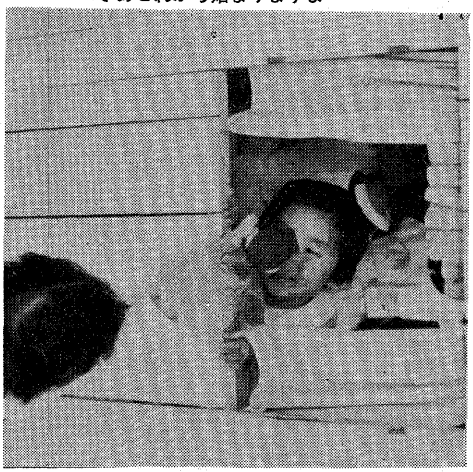
砂型であそんでいる子ども、バケツに砂と水を入れてセメントをつくっている子ども、じょうろで水をまく子どもなど勝手にあそんでいる子どもたちの中に、教師も加わって、山をつくりはじめたり、川をつくったりする。「○○ちゃんの川と続きそうね」「続けちゃおうか」などと発展してくると「何してるの。手伝ってあげる」「いれて」と参加者も多くなる。そして教師を媒介として、他の子どもとの関係も進む。

友だち関係を促進するような遊びを提供することも、子どもたちの間の触れ合いを盛んにするために役立つようだ。よくあそばれているままごとを中心に、いろいろなあそびを提供しようと思い、子どもたちがいくお店はどこかをきいてみる。花や、やおや、お菓子や、魚や、果物やなどがあげられる。「床やさんにもいくよ」とC男がいうので、床やを含めて、いろいろなお店をつくることを計画してみる。計画といっても、子どもたちが、先の見通しのもとに活動することは無理なので、折々に、花や、野菜や、魚や、お菓子をつくって、その結果いろいろのお店ができたといった経過をとった。作る活動で、最も子どもが喜んだのはケーキ作りで、小さな箱のケーキに、きびがら、紙のパッキング、色紙などで飾りをつけて、かわいらしいケーキがいくつもできあがった。お店やさんごっこは相手を必要とする遊びなので、「私、お花やさんよ、買いにきて」「ケーキ下さいな」などと、ままごとの子どもたちとも交流があり、子ども同士の交渉を盛んにすることには役立った。口が重く、友だち遊びに積極的でないD子なども、床やさんのお客さまになることで、他の子どもと接する機会を作ることができた。

友だち関係が盛んになってくると、はじめは単独飛行だったブロックキャップのサンダーバードやロケットも、発射台が協力して箱積木で作られ、グループあそびに発展したし、ままごとの窓を使って人形芝居をするグループも、観客席を作って「見にきて」と教師を呼ぶほど、子どもたちだけであそびが運ばれるようになった。

サンダーバードがとびたったんだよ

さあこれから始まりますよ



○ルールのあるあそび

共通なルールに従ってあそべるようになることも大切なことである。集団生活の中では〝きまりを守る〟ことが、どうしても必要となってくるので、このようなルールのあるあそびは、その態度を育てるよい機会となる。

入園のごく最初から遊ばれる〝鬼ごっこ〟や〝かくれんぼ〟も、はじめはごく単純な形であそばれる。つまり、教師対子どもたちの関係で、教師が鬼になったり、子どもは全部逃げたり、かくれたりする、あるいは交替に子ども全員が鬼になり、教師が逃げたり、かくれたりする。このようなことから、次第に「こんど、ぼく鬼になる」と名のり出た子どもが鬼になったり、希望者が多くなれば、じゃんけんできめるような、本来の形をとってくる。

教師と一しょにあそんだ楽しい経験は、子どもたちだけではじめ

うずまきあそび

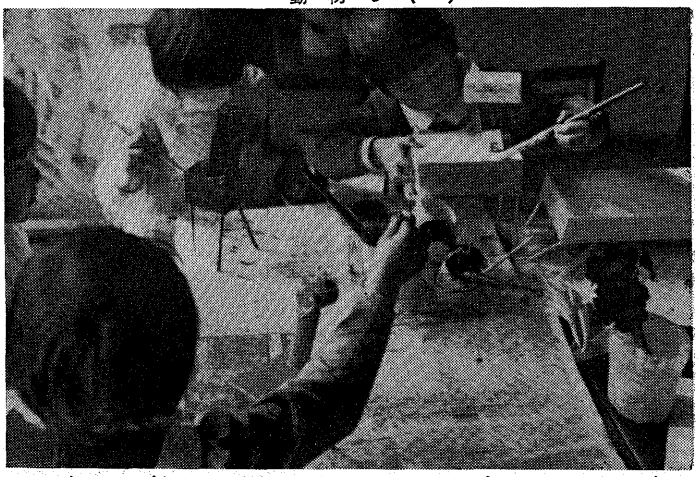
るあそびの中にとり入れられ、あそびを豊かにするから、時々、新しいゲームを紹介することもよい。木鬼、鉄鬼、たか鬼など、知っている子どもも多いが、丸鬼などは、年長組や教師の刺激によることが多い。〝あぶくたった〟〝花いちもんめ〟〝竹の子一本〟〝リレー〟など、教師と何度か経験するうちに、自分たちで数人集まってあそび始めることもできるようになる。うずまきあそびなども、一、二度教師から誘いかけてあそんだ何日かあとで、自分たちで仲間を集め、じゃんけんで二組に分かれて、リーダーと二、三人が石灰でうずまきをかいてあそびはじめたのは、三学期にはいってであったろうか、まことにみごとなあそびぶりであった。

○つくるあそび

自由にふるまえるようになってくると、子どもたちは、いろいろなものを作ってあそぶようになってくる。これらの〝つくる活動〟の中で、子どもたちは、くふうする態度や、いろいろな材料や道具を使う技術を身につけて、あそびも豊かになってくる。

秋も深まって室内あそびの機会が多くなる頃から、あき箱を材料に好きなものを作ることをあそびの中に入れてみる。はじめはセロテープでべたべたとはりつけるばかりの子どもたちも、次第に自動車、船、カメラ、無線機、家などいろいろくふうするようになる。「この屋根、もう少し厚い紙の方がいいんじゃないかしら」「このカメラ、ほんとうのカメラみたいに、ここ（レンズ）はったらどうかしら」など、材料をいっしょに考えたり、いろいろな材料や道具を次第にふやして、自由に出し入れできるように棚に並べておく。

目新しい材料は新しい刺激になる。割り箸をみつけてE男が作ったのは飛行機。箸のわれ目に翼状に切った紙をはさみ、わゴムでとめる。これは男児の間に流行し、ほとんどの子どもが何台も作ったようであった。左右の翼を別々に作って対称にならないF男に、左右をつづけて大きく三角に切ることを教えているG男。「翼が動いちゃうからセロテープではるといいよ」と自分の研究成果を教えにきて



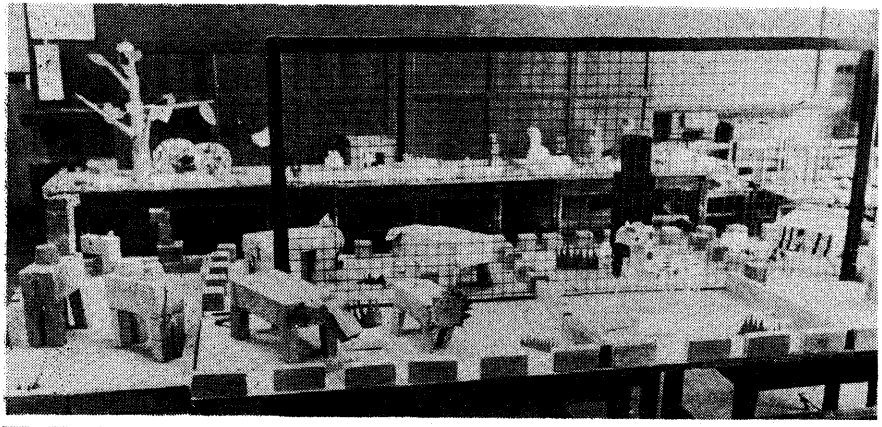
くれるH男。「ここにマークつけよう」と描いているI男。きっかけはE男の考えた飛行機の模倣から始まったが、それぞれにくふうしている。誰のがよくとぶか競争し、よくとぶ飛行機を作ることに挑んだものであった。

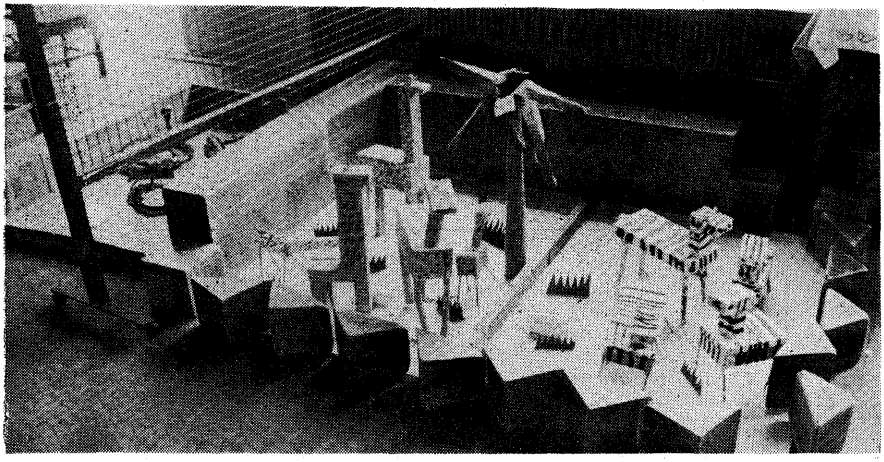
割鋏がほしいという要求がたびたびなので、自由に使えるように出しておいたところ、たくさん使えるということに刺激されて作ったのがギターである。箱の両端に数個ずつ割鋏をさし、対応した鋏にわゴムをかけて絃にし、細長い歯みがきの箱を柄にして、ひいてみせる姿はなかなかかっこうがよく、これも男児の間に大はやりで、割鋏の箱もさっそくからになってしまった。

あき箱でいろいろと作るようになってきたので、三学期は〝おもちゃや〟でもしようかしらと思っていたところ、園の都合で、動物園をするようにとのことであった。いろいろな情況から考えて、少し無理かとも思われたが、あき箱製作には大分親しんできているところから、あき箱を主にして作ること、大きい動物を協同製作するのでなく、個人で作ったものを持ち寄って動物園を開くという形をとること、動物園を開くという目的を主にして無理にいろいろな種類の動物を作るという方向でなく、子どもの状態に合わせて規模をきめていくこと、などの方針で働きかけてみることにした。

画用紙、あき箱、あきかんなどで、さっさと作りあげる子どももあり、作るものはきめたが材料を何にしたらよいか迷って手のつかない子どももあり、また、ひとりで、三、四種類の動物を作る子どももあり、一向に自分から作り始めようとしない子どももあって、いろいろである。材料から刺激をうけて思いつくものを作っていくおもちゃ類は、喜んで作っていた子どもたちも、作る動物をきめて、その目的に従って材料を考えたり選んだりすることは、少しむずかしかったようである。

しかしでき上がって、動物園を開く段になると、「白熊ないじゃない」「ひょうもないよ」「作ろうか」と張り切ってくれる。「もう間にあわないからこれだけでしましょうよ」という私に、「残念だね」といっ





てくれるのは、なかなか関心を示さずに最後にやっと〝おっとせい〟を作ったJ男。他の組の方やクラスのお母さま方を御招待してみんな大喜びであった。一部の子どもたちにも教師にも少し荷が重かったような気がしていたができ上がった喜びを子どもたちの中に見い出したとき、やっぱりよかったと思った。いろいろとくふうし努力したあとの成就の喜びは保育に欠くことのできない経験であろう。

以上、四歳児の経験のごく一部分に過ぎないが、大切と思われる、自発活動、友だち関係、集団生活のきまり、くふうする力の四つの点にしぼって考えてみた。思い返すと、この一年間も心に満たないことの何と多かったこと。ひとりひとりの子どもを大切にしようと思う気持ちも、35人という人数の中で、きりきり舞いをしてしまう。〝幼稚園におけるのぞましい活動のあり方〟というテーマについて書くようにとのことであったが、この課題は、実は、今も、これからも、私自身に投げかけている課題なのである。